

市指定史跡

大田原遺跡

石垣市指定史跡 大田原遺跡の概要

名蔵集落側（南東側）から向かうと、名蔵神田橋の手前東側、赤土の台地上に遺跡はあります。発掘調査が終わり、周囲は指定された部分を除いて切り取られてしまっていますが、以前は緩やかな傾斜をもつ小高い台地がもう少し東側と南側に広がっていました。

大田原遺跡は、沖縄県教育委員会（1978年）と石垣市教育委員会（1980年～1981年）によって2度の発掘調査が行われ、その結果、下田原式土器や石器などの遺物が多数見つかっています。他に、建物の柱跡らしきものも見つかり、竪穴式住居であったと考えられています。

八重山考古学上で重要な遺跡として、1996（平成8）年には、石垣市指定の史跡となっています。



大田原遺跡と神田貝塚（かんだかいづか）

大田原遺跡と神田貝塚は、すぐ近くにあり、一部、包含層が重なって確認されています。なお、大田原遺跡は、約3800年前の下田原期、神田貝塚は、1200年～1500年ほど前の無土器期の遺跡です（年代はいずれも、炭素14年代測定による値参考）。本州の考古学上、旧石器時代から縄文時代への変化をみても分かるように、土器のない時代から土器のある時代への変化というのは、常識のように考えられています。八重山諸島の考古学でも、早稲田編年に代表されるように、最初はそのように考えられていて、例えば、土器のない神田貝塚（無土器期）と土器のある大田原遺跡（下田原期）では、神田貝塚のほうが古いと考えられていました。しかし、八重山各所で調査が進んでも、不思議なことに古いはずの無土器期の遺跡では、鉄製品や中国唐時代の銭貨（開元通宝）が見つかり、新しいはずの下田原期の遺跡では、土器や石や貝を利用した製品しか見つかりません。それでも、長い間、無土器文化のほうが下田原式土器を出土する有土器文化よりも古いと思われてきたのです。

それが、1978年に沖縄県教育委員会が行った大田原遺跡と神田貝塚の発掘調査で逆転することになりました。この発掘調査によって、大田原遺跡の地層が、神田貝塚の地層よりも下にあることが、地層で確認されたのです。あわせて、同じような逆転現象が、波照間島の下田原貝塚（下田原期）と大泊浜貝塚（無土器期）の調査でも確認されました。これによって、土器のある時代から土器のない時代（有土器→無土器）に移行するという、日本国内でも他に例がない、八重山の不思議な先史時代の様相が分かってきたのです。

地層壘重の法則（ちそうるいじゅうのほうそく）

大田原遺跡と神田貝塚の関係を示した層の堆積とはいったいどのようなもののでしょうか。地層は突然ドンッと堆積するのではなく、積み重なるように徐々に堆積していきます。すると、積み木や本を積み上げるのと同じように、古いものは当然のように下になり、新しい物が上になります。「堆積してからしゅう曲したり、逆転したりして乱されたことのない堆積層では、どんな場合でも、いちばん若い地層はいちばん上にあり、いちばん古い地層は基底部にある。」という考えを、地質学では“地層壘重の法則”と言います。つまり、この考えに基づけば、下にある大田原遺跡の層が、上に乗っていた神田貝塚の層より古いということが言えるのです。

さらに、発掘調査後に行われた炭素14年代測定の結果、大田原遺跡がおよそ3800年前という測定年代が出たのに対して、神田貝塚は古くても1200年～1500年前という結果が出ました。また、神田貝塚が立地する砂地は、約2000年前に堆積した新期砂丘であることも指摘され、神田貝塚がそれよりも古くはならないということも分かってきました。このように、発掘調査の成果やその後の科学的な検証からも、無土器期よりも土器のある下田原期のほうが古いことが確認されたのです。この逆転を確認したきっかけとなったのが、大田原遺跡と神田貝塚の調査であり、八重山の考古学では、学問上、とても重要な遺跡の調査と位置づけられています。



大田原遺跡を見学なさる皆さまへ

大田原遺跡は、道路沿いにあります。見学は比較的容易ですが、すでに発掘調査が終わり埋戻しの後、遺跡の一部が保存されている状況です。そのため、包含層が確認できたり、何らかの遺構があるというわけではありません。しかしながら、名蔵川流域にあり、石灰岩上の赤土台地という遺跡の立地や、近接してある名蔵川の恩恵を受けた違う時期の遺跡の存在などを確かめることができます。

また、遺跡出土の遺物のうち、土器や石器類は、石垣市立八重山博物館に展示されています。

※遺跡を示す表示がありますが、そこから、台地上に登ったりすることはできませんので、ご了承ください。